

# 保育の日常

## ―見えることと見えないこと―

矢萩 恭子

園での生活が日一日と積み重ねられ、友だち関係が濃く親密になるにつれ、互いの間を交錯する感情や気持ちの表現は、より複雑になる。子どもたちの遊びや言動から、彼らの間に生起している生々しい感情や、葛藤に極力無神経でいたくないと願いつつ保育に向かう自分がある。

年中から年長へと進んでいく中で、行事などを通じてクラスとして考えたり、相談したり、行動したりする経験が多くなる。また、個人差はあれ、四歳から五歳の成長の流れは言語面での飛躍を現実のものとしていく。子どもたちは、自分の在り方を友だち同士の間でより滑らかに脈絡を

もって、主張できるようになっていく。同時に、そういった自分の在り方がうまく相手に受け入れられないことに対しても、言語的に対応して、強い不満を示すことが目についてくるようになる。或いは、友だちがそれに困難を覚えていると、第三者として、友だちの気持ちの代弁をして意見を述べたり、双方から言い分を聞いたりする人が現われるようになる。

特に、私が担任として難しいと感じるのは以上のような過程を歩んでいる女兒同士の感情の「もつれ」を察知したときである。彼女たちは、既に友だちには打ち明けても、大人には言わない、自分たちだけの交流世界をもっている。それは、必ずしも意識して大人には知られまいとしてそのような訳ではないこともある。たまたま、女兒同士で顔を突き合わせて意見の応酬をしているところに出くわして、敢えて大人の私が尋ねれば、「だっ

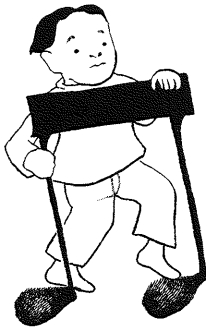
てね」とそのとき起きていることを説明してくれることもあるからだ。しかし、何か通じあわないことが起きると一大事とばかり、「せんせい、せんせい」と呼びに来た以前のような姿はあまり見られなくなる。「もつれ」に関していろいろ訳を聞いてみると、誰かと誰かの互いの葛藤を周りの友だちが心配して「○○ちゃんは、……っておもったから……っていったんだけど、△△ちゃんはまえのときこうだったからきょうは——ってしたくないんだって」などと、単純にその場だけの解決では済まされずに引きずり続けている人間関係の問題に立ち向かおうと複数の女兒が頭を悩ませていたりする。こうなると、保育者としても、やたらに大人の顔をして、彼女たちの間へ登場せず、に互いが十分に悩み、自分を出しあつて、壁をくぐり抜けていかれるよう子どもと同じ立場から意見を言ってみたり、様子を見ながら見守っていこ

うという姿勢になる。但し、密かに濃密に交流を展開しているらしい子どもたちの様子を的確に見守ることはとても難しいし、何が子どもたちの間で起きているのかをつぶさには掴みにくいことも多い。顔つきや表情、何気ないつぶやき、いつもとは違う行動などからそれらを敏感に察知するのは容易でないこともしばしばである。

MとTは、年中の頃から室内で絵を描くという共通の過ごし方を好み、一緒にいることが多かった。特にTは、友だちへ向かう気持ちよりも、自分自身の活動への満足の方が大きいらしく、周囲を気にすることなく、たとえば、保育室に一人残るうとも好きな絵を黙々と描いていたりした。それは、少女マンガ風のみごとな描写力の絵だった。一方Mの方は、幼稚園に言ったら、あれもやりたいこれもやりたいと思っ描いていることが多く、

外へ出たがらないTとは別に、色鬼や高鬼をまた他の友だちと一緒に楽しんでた。そのことを二人の間でどのように受け止めあっていたのかはわからないが、一旦絵を描き始めると二つの頭を擦り付けるように寄せあつて、おしゃべりしながら吹き出しつきの鉛筆描きの絵を延々と描き続ける姿が見られた。

やがて、年長になると、遅時きながらTも園庭での複数の友だちとの遊びに興味を湧いてきたよううで、加わるようになるが、経験が足りないのと慣れていないせいで、既に他の子どもたちの間で



は了解されているルールをよく理解していなかったり、相手の行動を誤解して悪く受け取って憤慨したりとぎくしゃくした感じがしばらく続く。相変わらず仲の良いMも、外での活動のときはTと歯車がうまく噛み合わない様子で、むしろ、Tの方はMがいけないときの方が戸外で嬉々として活動的に遊ぶ。一方、室内での活動では、二人そろうと途端に二人だけになり密やかに絵を描き、手先を駆使して細かく精密なものを製作し、それを使って遊んでいた。そうなると、園庭では親しく遊んでいたAやWも二人の世界には入ろうとしない。このあたりの女兒同士の関係は非常に微妙であった。

二人の活動のなかでも特に面白かったのは、緻密に絵を描いて、切り抜いて貼ったりしたものを使ってお話をつくり、即興で演じてみせてくれる活動だった。この二人に影響されて、ある月の誕

生会ではゲームやマジックの他に四つのグループが自作の（即興）劇を演じるという事態（お陰で一時間半以上かかってしまったが）になった。MとTは、何かピカッと互いの力が合わさると、ぐんぐん活動に加速度がつき、実に生き生きとして過ごしていた。そして反面二人の世界に引きこもりがちにもなった。

一方、晩秋の頃から、今度は大声で罵り合うようなくなることが多くなる。Mは「あやまったのにTちゃんがおこる」と言い、Tは「Mちゃんがあやまってくれない」と訴える。私が双方の言い分を聞いて間に入ると、二人ともますます自分を主張して平行線となる。少し間を置いて様子を見てみると、Mの方が折れてやるらしく、Mが「Tちゃんと仲直りできた」と報告に来て終わるといことが多かった。この頃のTは小学校進学へ向けての準備のストレスからか気になる行動が増えてい

た。「わたしのほうがさきにつかっていたのに」  
「わたしはあやまったのに、くちゃんはあやまってくれない」といった主張を頑として曲げず、相手の気持ちを聞こうとするゆとりをなくしていた。

そんなある日のこと、どこで気持ちが屈折したのか、Tと遊びたいMの気持ちを知りながら、Tはおべんとうのとき、Aのとなりに行き、Mを入れてやらなかった。帰りのときも、TはわざわざAのとなりに入ろうとしたらしく、同じようにAのとなりに座ろうとしたMとぶつかってけんかになる。状況を聞いてみるが、釈然とした話が引き出せず、両者納得しないまま、その場は二人ともAから離して座らせた。翌日、TはまだMのことを怒っている。前日の出来事を感じしていたであろうAに事情を聞いてみると、MはTよりあとにAの隣に来たようで、それがTは許せないらしい。

かった。Tに拒否されたくないMが、直接Tの隣にはなく、Tと並んでいたAの隣に入ろうとしたのかもしれないと私は思ったが、二人とも前日の経緯よりもそのときの不機嫌さに支配されていて、なかなか歩み寄れない。Tは言う。「だってわたしはあやまっているのにMちゃんがあやまってくれないだもん」。Mも言う。「Tちゃんだってわたしはあやまったのにゆるしてくれない」。両者とも自分の行為の悪かった点はしつかり分かっているが、相手の話を聞いて耳を貸して相手を許すことができない。

数日後、登園して、MとT二人して保育室のまごごとコーナーで楽しそうに遊び始めるが、じきにけんかになる。Tの言い分が、何とも筋が通っているようでいて、いかにも不自然であった。Tによれば、まごごとをしたいのはMであって、自分は絵を描きたかったのだと言う。しかし、Mは

一緒にTと遊びたいと言うので、自分は「がまんして」Mにつきあってままごとをした。今自分は、一人で絵を描きたいのにMは描かせてくれない。Mの方はというと、でも、自分はTと二人だけで遊びたいし、一緒にいたいのにと言う。すると、Tは、二人の遊びたい「いけん」が違うのだから、一緒には遊べないと応える。Mも諦めない。Mへは、一緒にいたいのは分かるけれどTちゃん今はいやだつて言っているから仕方ないでしょうと他の友だちとの関わりへととりなし、Tへは、今になってそんなことを言うんだつたら最初からがまんなんかしないで本当のこと言つた方が良かったんじゃないのと反省を促す。

そんなことがあつても、MとTは分かちがたく魅きあつていて、やはり一緒に過ごすことを互いが求めていた。Tが理不尽な理由を強い調子で言葉にしても、Mは、一方的にTに支配され、言い

たいことも言えずにいる訳ではなかつた。MはTの痛いところを指摘するので、ぶつかりあひも多く生じた。意見が違ふ

のだからとすつたもんだやりあつたその翌日、今度は二人して絵本の部屋に籠もり、よそのクラスのおもちゃにびつしりとセロテープを貼るといったずらをしていた。どうも扇動していたのはTの方らしかつたが、それには何とも言えぬスリルと興奮があつたようだった。その後も、保育室のあちこちにマジックで色を塗つてしまうような、今さらと思えるいたずらを次々と行なつたり、互いの悪口を紙に書きあつたりしていた。



こうして、二人の関係を振り返ってみるととても独特で意味のありそうな行為が浮き彫りになる。だが、それも後になって、まとまってある期間を振り返ることができるからであって、そのときは、はっきりと表面化してこない二人の気持ちは、はつきりかねるとまどいがあった、MとTはかなり親密に付き合っていたので、表面上は担任の私に示してくれないこともたくさんあるようだった。私が気付けないところで交わされた会話、語気や態度がもたらす小さな確執、繰り返される対立と和解は数えきれないほどあったろう。込み入った双方の気持ちは、大人の私よりもむしろ、MやTを取り巻くAやWの方が詳しかった。

結局、私はその場で利他的にしか関われなかつたような気もする。もちろん、MとTそれぞれに対しては、担任としての気になり方で個々のテーマを把握しているつもりだった。個々の抱

えるテーマやそういったテーマを生み出しているであろう背景にも思い至らせ、考えを整理し、私なりのアプローチを繰り返してみる。結局それが精一杯のところ、で女児同士のぐちゃぐちゃとした感情の表出につきあい、寄り添うことの不確実な感触は拭い去れない。言ってみれば、それが保育する日常の実際であり、間断ない歩みであるのだろう。

(洗足学園大学附属幼稚園)